

柴川敏之展にあわせ、8月4日(土)に合計3回のワークショップを行った。内容は、柴川氏の作品の表面に埋め込まれたさまざまな物たちをフロタージュの手法で紙の上に写し取るというもの。これを拓本とよぶ。当初予定していた午後からの2回に加え、堺市立金剛南中学校の美術部顧問の山花教諭からのリクエストにより、急遽、美術部員23名を対象としたワークショップが追加開催された。

柴川氏は、展示室の前に集まった中学生たちを10数人ずつのグループに分けて、まずはゆっくりと作品を鑑賞させる。しばらく鑑賞させた後、ひとつの円のまわりに生徒を集めると静かに作品の説明をし、一人一人に何を作品の中にみつけたかを訊ねていく。見事な導入であると思った。まず、全体の空間を感じ、そして細部に目をこらすという鑑賞が自然と行える。

このワークショップ自体が見ることの訓練であると思う。実際に拓本をとってみるとわかるのだが、「ここにあるこの形を写しとろう」と思っているだけでは別の形が浮き出て来たりする。それは作品表面の凹凸の違いによるものだが、目で見ていただけでは全く気づかなかったものがそこにあることに拓本をとって初めて気づいたりする。また、他の人の制作を見ていると、自分が気にも留めなかったものが活き活きとそこにあったりもする。

合計31名が参加した午後からの2回では、1枚の紙の中に複数箇所の拓本をレイアウトし、全く新しい空間構成を行っているものが少なからず見受けられた。これは参加者の中にプロの美術作家や染色家などが含まれていたためかもしれない。柴川氏の作品を媒介として制作されたものはあくまでも彼の作品の副産物のようなものであると思うが、そのような場合には一体これは誰の作品であるかということを考えさせられる。それは、ワークショップで制作した作品をその後どう扱うかということにも関わってくる。参加者は制作した作品を柴川氏に託すか、自分で持って帰るかを選ぶことができるのだが、彼らの手元に残った作品は彼らの作品だろうか、それとも、柴川氏の作品との出会いの記念だろうか？

会期中にはワークショップ以外でも、スタッフを含め多くの人が拓本づくりにチャレンジした。「自由に作ってよい」と言われると却って緊張してしまうこともあるようだが、いったん制作を始めるとみな夢中になっていたのが印象的であった。何かを自分の手で作り出すということは、単純に楽しいことなのである。そして、このワークショップを機に、日常の身の回りの小さな事物にも目を凝らすということがあれば、幸いである。

小口斉子  
大阪府立現代美術センター学芸員